
環境教育における体育の役割

徳山郁夫¹ 松岡信之²

¹千葉大学 ²国際基督教大学

The Perspective of Physical Education in Environmental Education

Ikuo TOKUYAMA¹ and Nobuyuki MATSUOKA²

¹Chiba University and ²International Cristian University

Abstract

The purpose of the present paper is, regarding the role of physical education in environmental education as a means of fostering the "body" which acts as the ground of embodying acquired knowledges, techniques, and one's sense of value relating to natural environments, to find out the cue of teaching physical education from phenomenological aspect.

After discussing the cognition of the "body", the relations between human beings and environment, and between the subject and the object, followings were concluded as basic experiences to be acquired through physical education activities in the context of environmental education.

- 1) To notice and examine the inner-feeling of the "body".
- 2) To comprehend things not only by knowledges but also by informations through the "body".
- 3) To think and express with the "body" by using it as a means or a process of problem solving.
- 4) To restore the "body" into one's daily life by relating the "body" positively with daily activities.

1. はじめに

環境教育とは、現行の教育に環境との関わり方という視点を取り入れ、環境への関心を深め自然破壊などに歯止めをかけるとともに、人間の成長において人間と環境との関わりによる貢献を積極的に取り入れようとするものである³⁾。

環境教育が知識の伝達に終始するものではないことは改めて言うまでもない³⁾。環境教育は人間と環境の関わりを理解し、価値観を学び、またこの価値観を体現化する能力を育むものである。すなわち、環境教育においても教育の三つの要素である〔知育〕〔徳育〕〔体育〕という側面からのアプローチが果たされなければならない。

本論は、自然に対する知識、技術、価値観を自己の「からだ」によって培うことを目指し、その

ような「からだ」を育む方法を探るものである。

2. 環境教育としての「からだ学」

(1) 人間と環境の関わり

人類は、自己の身体をとりまくさまざまな環境ときわめて密接な関係を保って生きてきた。人類500万年の歴史の中で、暑さ寒さに適応し、経験を通して技術を修得し、知恵を集積するような身体の仕組みを受け継いでいる。ところがわずかに数十年の間に生活はより便利に、より安楽にという方向に急激に変化してきた。すなわち、あらゆる無機的・有機的な環境を人工的に作り変え、きわめて安定した人工環境を発展させたのである。しかし、その結果として身体と環境との密接な関係が失われ、本来身体が受け継いできた適応能力

を發揮することが少なくなってきたのである。人工環境の発展とは裏腹に、人間の身体は脆弱になってきているのではなからうか。皮膚の内側の身体を甘やかし、自らを虚弱にしておいて、その代償を、もの言わぬ自然に押し付け、これを侵略し、食い潰しているのが現代の社会の人間の生き方と言えるのではなからうか。

自らの身体だけが快適であればよいといった発想は、エアー・コンディションに象徴されるような多大なエネルギーを浪費するシステムを作っている。身体は暑さに対しては汗腺を発達させ皮膚からの蒸散作用を助け、寒さに対しては皮下脂肪を増加したり筋収縮によって体温の産生を高めて対応してきた。しかし現代では、気密性を保ったシェルターのような空間に閉じ籠り、その中の快適さのみを追求している。外の空間から多くの資源を取入れて多大のエネルギーを消費し、その結果多くの廃棄物を出して、外の空間を荒廃させても一向に無関心であった。このようなことの根底には、周囲の環境との応答を無視し、自らの快適性のみを追求するという発想がある。

今日の日本の多くの子どもたちは、漫画、ファミコンのような電子玩具、さらにはテレビ、オーディオ・セット、電話などに満たされた密室で、誰に煩わされることない快楽を享受している。しかし、この密室の中で行われるコミュニケーションは、無機質な物質を相手にした一方的なものである。このようなコミュニケーションでは、気になければスイッチを切るなり、捨てるなりすればいい。そして、このような密室に閉じ籠ることが可能になった結果として、自分の考えとは異なるものと出会うことや、自らが痛みを被ったり自らの行為に他者が傷んでいることを目の当たりにするのを回避するようになったのである。

(2) 主体と対象の関係

清水⁶⁾は、生命の普遍的本質を「無限定な環境から送られてくる信号を取り出し、蓄え、解釈し、意味を自己創出することにある」と述べている。これにしたがって考えるならば、意味は対象そのも

のにあらかじめ含まれるものではなく、主体と対象との関係として生じるものである。

私たちは社会に生きているのであるから、コミュニケーションのためには各々の社会に共通する既成概念について了解する必要を迫られていると言える。したがって、私たちは人為的、恣意的に編集された情報の意味を解釈する能力を訓練する必要がある。

しかし、知の根底には既成概念にとらわれず、主体が対象に対する情報を蓄え、解釈し、意味を創出するということがある。自らが受け取った第一次情報に意識を傾け、この情報の主体的処理によって意味を自己創出することが重要なのである。

他者によって人為的、恣意的に編集された第二次、第三次情報としての「善い」「悪い」だけではなく、感受性豊かな第一次情報に基づいた「善い」「悪い」という吟味がなされなければならないのである。このような主体と対象における関係は、人間と環境との関係にも置き換えて考えることができる。

今日、環境問題についてのさまざまな議論が展開されるに至った過程には、人間とこれを取り巻くあらゆる環境との間に、これまでの二項対立的な既成概念による解釈では対処できない問題が認識されてきたことがある^{1)・4)・5)}。あらゆる環境との出会いにおいて、その関係の中に自己を見いだし、人間社会を見い出すといった、既成概念にとらわれない感受性豊かな関わりが求められるのではなからうか。

このような立場から、自らの第一次情報（自らの身体感覚）を重視し、そこでの経験をもとに形成される〔経験知〕ということに注目する必要がある。

(3) 経験知について

中村²⁾は、近代科学の発達以来、人々が科学的知識を通さずには現実を見ることができなくなったと指摘している。そして<普遍性><論理性><客観性>という三つの原理によって特徴づけられた科学が、一方で<固有性><多義性><身体

性>を無視せざるを得なかったと述べている。

科学が無視し見落とさざるを得なかったことを見直すことは、さまざまな現代社会の歪を解決する糸口になるのではなからうか。そのためには、自己の固有の身体を基盤とした思考を展開し、身体の経験を通して得る「知」を重視する必要がある。このような、身体の経験を通して得る「知」を、筆者らは敢えて「経験知」と名付けるのである。

ここで言う「経験」とは、ただ何かを「行うこと」あるいは受動的に「体験すること」ではなく、能動的に関わることである。そのことによって、身体をそなえた主体としての存在を自覚するとともに、他者や周囲の環境の中に身をさらし、それらの環境との関わりを感覚する受動性をも自覚するのである。すなわち身体を働かせることへの意識とともに、それに伴って受動する感覚への能動的な意識の傾倒である。

(4) 環境としての「からだ」

ここで言う「からだ」とは、精神に対応して語られる身体、もしくは皮膚に隔てられた内側の身体のみを示すものではない。人間は、より遅くより強く生き続けるために、皮膚の外側の環境に感応して、その意味を認識し自らの身体を働かせているのである。このように生物である人間の「からだ」は生きていくための場に成り立つものであり、孤立した個体として考えることはできないのである。すなわち、われわれが健康や生活の問題を考える上では、「からだ」がそれを取りまくさまざまな環境との関係の中に存在しているのであり、いわゆる「身体」よりも広がりのあるものであることを理解しなければならない⁷⁾。

「からだ」をこのように認識して環境について考えると、主体である人間とその対象としての環境というように、二項対立的に考えることに問題があるのである。

具体的な例を示すと、「からだ」はさまざまな体験を通じた学習や運動技術の習得、あるいは身体の発達や衰退によって、コントロールできる範

囲に差異を生じるものである。日常生活においても、気温、気湿、気圧など周囲の状況の変化に「からだ」は順応する。またこの順応の幅は、生活経験やトレーニングによってさまざまに変化する。スポーツ場面などに見られる相手との“間合い”の感覚、あるいはテリトリーという感覚、さらにスピードや力などをコントロールが可能な範囲も「からだ」の順応作用の結果といえる。

視点を変えて考えると、現実社会における自己の「からだ」の存在は、他者にとっての環境である。私たちの社会生活は、他者に見られ、認められる、そのことによって多大な影響を受けるということを前提に進められているのであり、客観的な身体という立場だけでは存在し得ないのである。

環境としての「からだ」を学ぶということは、「からだ」と環境が対立する概念において考えられるのではなく、環境の中に「からだ」を位置づけて考えることである。

3. 体育における試み

これまで述べてきたように、「からだ」とは皮膚の内側として外界から隔てられた空間を指すものではない。主体と対象の間に創出した関係性として生じるものである。このような関係を見出すことによって、自らの身体と環境が一体化した領域としての「からだ」を持つことができるのである。

このように身体を超えた広がりのある「からだ」を育てることが体育であり、環境教育における体育の果たすべき役割であると考えている。

主体と環境を一つの場として考えられるような「からだ」を育てるには、「経験」を重視することが必要である。しかし、単にさまざまな体験を積み重ねるだけではこのことは有効には果たせないのである。「経験」するというだけでは、認識すべきことへの主体的な働きかけが重要であり、何かを覚えるということよりも、そのことによって受動する感覚に意識を傾け、その感じたことから何を考えたかということに着目しなくてはならない。

このような観点から、体育における試みの視点を次のように整理する。

- ① 自らの「からだ」を感じる
- ② 「からだ」で感じる
- ③ 感じたことを考える
- ④ 暮しに「からだ」を取り戻す

私たちは、自分の「からだ」で感覚したことから認識を形成するよりも、社会通念、あるいは固定観念といったものにとらわれ、実際に観察し感覚したことよりも記号的に解釈を進めて認識を形成している場合が多いのではないだろうか。しかし、一方で「からだ」の感覚に意識を傾け感受性を豊かにして、自分を取り巻く生命の場としての環境と個体との密接な関係を自らの感覚でとらえることも必要である。自己の感受性とは、固定観念にとらわれることなく、自らの感覚でものごとをとらえ直すことであり、[経験]とはこのように身体の感覚に意識を集中することにほかならないのである。

(1) 「からだ」を感じる

a. 「からだ」の観察……個有の身体を観察

統計的に平均化された身体ではなく、自身の身体を観察の対象とする。生物は多様な存在で、決して同じ形を持たない。形としての個性を発見したり、今までに気づかなかった側面に観察の視点を向ける。

b. 「からだ」を感覚する……重さ、緊張と弛緩、タッチなど

ダイナミックな動きに伴う感覚の変化を観察の対象にする。自らの身体部分の重さ、特定の部位の筋の緊張と弛緩の比較。ボールなど道具と手のタッチなど、さまざまな感覚に意識を傾け、能動的に動くこととこれによって生じる受動的な感覚を考察する。

c. 身体を超えた「からだ」……間合い、呼吸(タイミング)など

前述したように「からだ」は物質的な側面のみではない。このような側面は、日常の生活場面でもよく観察される。身体活動でよく体験する“間

合い”をとることや“呼吸を合わせる”というような場面は「からだ」が物質的側面を超えて存在していることを表している。様々な間合いをとったり、タイミングを合わせる活動を行い課題の成否とその考察を行う。

d. 動物としての「からだ」

人間は運動することによって生存してきた動物である。また、歩くこと、走ること、重いものを持ち上げること、投げること、叩くこと、捻ることなどの動作、また他にも栄養を摂取することなどの動作以外の機能も、生活の原点として備えている。生きることはこれらの機能を発達させることである。このような動物としての「からだ」の側面への気づきを育てる。

e. 広がりを持つ「からだ」

「からだ」は身体を超えた広がりを持つものである。身体の外の自然、文化、歴史などの環境と「からだ」の主體的な関係を「からだ」の一部として認識することができる。このように身体を超えて広がりを持つ概念を「拡大身体⁷⁾」と表現する。自己の生命とあらゆる環境との間に主體的な関係を見いだすことによって、自然、文化、歴史などから孤立することなく、広がりある「からだ」の成り立ちが自覚できるようになるのである。

(2) 「からだ」で感じる

随意的にさまざまな運動が遂行できるのは、動きに関わる身体部位や物などについて了解できている「からだ」があるからである。運動を通して「からだ」の使い方を知ることはもちろんであるが、そのほかにも[経験]によって、改めて「からだ」の存在を認識するのである。

a. 身体運動課題

特定のスポーツ技術の中に存在する「身のこなし」には他のさまざまな動作と関連する要素が含まれている。さまざまなスポーツ技術や日常生活の動作の中に共通する運動要素を学ぶ。

b. ヒューマン・スケール(身体的尺度もしくは主體的尺度)

今日、われわれは生活する時空間の中に様々な

普遍的尺度を設定している。尺度とは、元来は人間の能力を基盤に設定されていたものであって、必ずしも普遍的なものであったわけではない。それらは社会機構の変化にともなって、普遍性を求められるようになり、科学的な根拠を持つ尺度に統一されてきたのである。しかし、私たちは経験的に知っているように、一人一人の日常の暮らしは決して普遍的尺度で画一的に過ぎて行くものではない。日常の暮らしは、個体差を持った人間の相対的な時空間である。

主体的に生きるとは、自己の身体能力と周囲の時空間との主体的な関係を見いだすことである。このような関係を把握することが、さまざまな機会をとおして試みられなくてはならない。

一日の歩行数から行動した距離や消費したカロリーを換算し、自分の身体的能力や行動の実感から生活空間を見直すことができる。例えば、実際に歩くなど経験的に関わった山については、その時のさまざまな実感をもとに、その風景に対する印象を形成する。また所要時間などを記録することによって、ただ風景として見ていた山の大きさや、自己の「からだ」の能力などと関係を持って主体的に再認識される。私たちはこのようなことから自分自身のヒューマン・スケールを組替えていくのである。

① 心情の理解

軟弱、苦しみ、痛み、疲労感、緊張感、連帯感、羞恥感などの心情は、実際にその場に参加しないとわからないものなのである。他人が「苦しそうだ」「痛そうだ」ということと、自己の「からだ」が「苦しい」「痛い」と感じることは異なるのである。他人の心情をよく理解するには自己の「からだ」で痛み、苦しみを実際に感じることも必要な場合があることは否定できない。

② 「からだ」で考えて、「からだ」で表現する
スポーツ技術を習得する場合には、その技術の奥行きを知識として知っているだけでなく、自己の「からだ」を通じた経験として積み重ねていくことが必要である。「からだ」で感じたものを

「からだ」で考え、「からだ」で表現することがスポーツ技術を獲得することにつながっていくのである。

(4) 暮らしに「からだ」を取り戻す

スポーツに参加することだけが「からだ」を育てることではない。「からだ」の存在に自信を持ち、「からだ」を積極的に日常の暮らしに介在させて思考できるようにすることが大切なのである。

「からだ」の機能は、体力テストやスポーツのためだけにあるのではないのである。自らの「からだ」を介在させることによって、自らの感覚で周囲を見ることができるようになり、日常の暮らしの中に自己の「からだ」を位置づけることが大切である。このように暮らしの中に生き生きとした「からだ」を取り戻す視点から生活環境を見直さなければならない。

4. まとめ

自己の存在は身体を超えて、環境までの広がりをもった「からだ」として考えなければならない。したがって「からだ」を学ぶことは環境を学ぶことなのである。環境教育においては、知識として自己の外側の環境を知るだけでなく、環境の痛みを、そこに含まれる「からだ」の痛みとして感覚できることが求められるのである。

体育がスポーツのルールやその普遍化された技術を学ぶこと、あるいは身体機能の強化のみに終始していたのでは、環境教育への積極的な関わりは期待できない。

現代社会の生活は、自らの「からだ」を働かさずに、いかに安楽に過ごすかという発想のもとで展開されているように思える。しかし、さまざまなスポーツ場面は、自らの「からだ」を最大限に発揮したり、多様に働かせなければならないために、自らの「からだ」といろいろな側面での出会いを得る絶好の機会となる。この場面での「からだ」との出会いに意識を傾けることこそが体育の重要な課題となるのである。そして、暮らしに位置づけられた「からだ」こそが、環境を適正に評価

する基準の一つとなり得るものと考える。

豊かな自然環境の中に飛び出し、自然の恩恵を受けることも環境教育の一つの方法ではあるが、野外で展開される活動であるから環境教育であるという安易な考え方にとどまってはならない。さまざまな身体活動を通して、自らの「からだ」に潜在する機能や能力に引き出し、あるいは感受性の豊かな「からだ」を育てることが、環境教育における体育の役割であり、体育の本来の姿である。

参考文献

- 1)加藤尚武「環境倫理学のすすめ」丸善ライブラリー、1991
- 2)中村雄二郎「臨床の知とは何か」岩波新書、1992
- 3)沼田 真「環境教育論」まぜと自然、かかより、東海大学出版会、1989
- 4)レオポルド、A、「野生のうたが聞かえる」東林書房、1986
- 5)佐倉 統「現代思想としての環境問題－脳と遺伝子の共生－」岩波新書、1992
- 6)清水 博「生命と場所－意味を創出する関係と学－」、NTT出版、1992
- 7)徳山郁夫・松岡信之「一般教育としての体育の展望－暮らしの中の『からだ学』の提唱－」千葉体育学研究、第14号、p.65-75、1991
- 8)徳山郁夫「環境教育における体育の役割」体育の科学、42(9)、p.740-743、1992

(平成4年12月10日受付)